**令和６年度第１回すみだタウンミーティング　議事録（要約）**

■区長挨拶

区長になって以来、多くの区民の皆さんとタウンミーティングを通じて、忌憚のない意見を聞かせていただき、それを区政運営に生かすという取組をずっと続けてきた。

区長や区議会が区を作るわけではなく、区民の皆さんが様々な立場で、様々な思いをぶつけていただきながら区政を動かすということが一番大事だという考えに基づいてタウンミーティングを実施している。

今までも中学生、子育て世代等様々な方を対象に開催してきたが、「みんなの“夢”をストックしよう！～総合的芸術祭に向けて～」という、大きな夢の実現に向けたテーマで開催する今回は一番緊張している。いずれにせよ皆さんのお力を借りながら、そして今日は皆さんのグループへ入ってお話ししながら様々な声を聞かせていただきたい。

コロナ禍で、皆さんの日々のお仕事、生活は苦しかったと思う。ただ、ここで感じたのはやっぱり人間の心の豊かさとか、生活にゆとりや力を与えてくれるのは文化であり、芸術であり、音楽であり、そしてこういう人々のふれあいであるということに気付いた人たちも多かったのではないかと思っており、コロナ禍で皆さん苦労した分、現在は様々なイベントが様々なところで行われている。

皆さんが一生懸命今やっている文化芸術活動を一堂に集めて、すみだの持っている「地域力」を生かした新しい芸術祭をやってみたいということで、再来年秋に開催を計画しており、それが今日のテーマ「総合的芸術祭」である。

隅田川があって、葛飾北斎が素晴らしい作品を残して、そして大相撲があって、お祭りがあって、伝統文化、更にはものづくり。「すみだならでは」のまちの特色、魅力、資源がたくさん散りばめられているのが墨田区である。総合的芸術祭ではそうしたすみだの地域資源を文化芸術と掛け合わせて、アーティストと区民の皆さんが一緒に、または皆さん自身がアーティストとなって行う表現活動、こんなものを通じて、すみだで暮らしている人、働いている人、そして訪れていただいた観光客の人に、この地域への誇りと愛着をぜひ高めていただきたい、そんな想いが詰まっている。

今日の参加者の皆さんは、今までアートを通じて様々な形で区にご協力いただいていたり、それぞれが主催者として様々なイベントを企画していただいていたり、技術を持っていたり、間違いない人ばかりだというふうに思っているので、ぜひ皆さんの「想い」や「夢」をこの場で、時間は限られているが、たくさん聞かせていただきたいと思う。

総合的芸術祭を進めていくうえで今日がキックオフとなるのかなというふうにも思うので、皆さんが柱になって、しっかりと進めていきたいということを心からお願いを申し上げるとともに、わくわく楽しみにしているという気持ちもある。

最後に本日ファシリテーションをしていただく神野先生、そして青木さん、このお二人に感謝を申し上げながら、うまく進めていただきたいということをお願い申しあげて、想いや夢を語り合えるわくわくタウンミーティングのスタートということで、どうぞ皆さんよろしくお願いします。ありがとうございました。

■ゲスト自己紹介

神野：　今日のタウンミーティングでは、墨田区で総合的芸術祭を行うに当たり、皆さんから様々な挙げていただいた様々な意見を共有して次のビジョンが示せたらいいと思う。まず、きっかけとなるような話を私からさせていただき、その話を受けて青木さんの方から、墨田区らしい、墨田区で行われている、青木さんが行ってきた青木プロジェクトを、芸術祭のイメージの一例として示してもらうということを最初に行いたい。その後に私たちもファシリテーターとしてグループに入り、アートに対する様々な想い、イメージを共有したい。

　　　　また、私も墨田区に関わって数か月になるが、非常に様々な人の活動があって、様々な人と人との濃密な関わりがあると感じている。

　　　　まちでどんなことが起き、起こるといいなということを、皆さんの長い経験、あるいは最近経験したことから紡ぎつつ、将来的にはどんな芸術祭になったらいいなというような話をそれぞれのテーブルでして、そして全体で共有できたらと思う。

　　　　先ほど区長がおっしゃっていたように、今日は芸術祭のキックオフだと思うので、参加者の皆さんは非常に強い関心を持ってここにいらしていると思うので、芸術祭を実際に開催する際には頼りになる存在だろうと思う。

　　　　今日は私と青木さんの方で進行させていただき、実りある機会にしたいと思う。

青木：　この後、私からも具体的な事例紹介をさせていただく。平成28年頃から墨田区を拠点に文化活動を通じて地域に関わっている立場からということで、今日はファシリテーターとして皆さんと一緒にいろいろ話し合えればと思っている。

■ゲストトーク

神野『芸術祭が求められるわけ』：

私からは、芸術祭を今なぜやるのか、また全国各地で芸術祭が行われている背景には、一体どのようなことがあるのかを共有したいと思い、話をする。

なお、アートに詳しくない、芸術祭に行ったことがないというような人にも向けた話になっているということは、最初にお断りしておく。

墨田区で芸術祭を開催することとなったのは、偶然ではなく法改正等の流れを踏まえたものである。日本には長い間、芸術に関する法律がなかったが、2001年に文化芸術振興基本法が議員立法により成立した。そしてこの間、少子高齢化・グローバル化の進展など社会の状況が著しく変化する中で、観光やまちづくり、国際交流等の幅広い関連分野との連携を視野に入れた総合的な文化芸術施策の展開が、より一層求められるようになってきた。また、東京2020大会はスポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあることから、文化芸術による新たな価値の創造を広く示していく好機でもあった。そのような背景を踏まえ、2017年に文化芸術基本法が改正された。

文化芸術というと、従来の伝統的な芸術のジャンルというものがあり、これを盛んにしよう、要は演奏する人、制作する人たちを補助、応援し、そしてそれを観る、享受する人たちの機会を確保しようというのが基本だったが、現代においては様々な課題があるため、東京2020大会を契機として、文化芸術による新たな価値の創造というのが社会にとって必要であるということが言われるようになった。

そこで、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業、その他の関連分野における施策を本法の範囲内に置く。つまり、文化芸術が一部の限られた個人の好みの中で行うようなもの、それも大事であるが、それに加えて、社会の様々な領域に関わることでより深く、発展的なことができて、社会の進歩や発展につながっていくということが、この法律の精神として謳われている。

また、伝統芸能の例示として食文化の振興が明記され、そして今回のタウンミーティングのテーマである芸術祭の開催支援についても明記をしてされた。つまり、芸術祭を開催することが、我が国にとって重要なことであると位置付けられている。

この10年の間に文化芸術をめぐる状況というのは非常に大きく変わっており、少なくとも2000年代に入ってからかなり大きく変わってきた。

先ほど述べたとおり、ジャンルは既存のハイカルチャー中心の捉え方から、食文化のようにより幅広くジャンルを捉えるべきことが望まれ、また、文化芸術が従来の個人的な楽しみから、文化芸術以外の社会の様々な領域の課題解決にも実はすごく重要な役割を果たせるということが期待されている。

そのため、総合的芸術祭というと、昔の芸術の捉え方だと、ハイカルチャー中心のジャンルの発表会というイメージになるかもしれないが、この「総合的」というのは、恐らく社会の様々な領域と関わり得るという意味での「総合的」だというふうに考えていると思われる。

そのような状況が生まれた理由は、大きく二つある。

一つは過疎地域で行われてきた「地方の芸術祭」の存在である。過去の事例として、大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭が挙げられる。大地の芸術祭は行かれた方も多いかと思うが、2000年から新潟県の妻有地域という、過疎化が非常に進んでいる豪雪地帯で北川フラムさんが総合ディレクターとして主導した。

従来、文化芸術の事業というのは文化庁の予算を使って開催していたが、地方の芸術祭では、経済産業省や国土交通省といった、文化芸術を所管していない国の機関等の予算を使い、アートを通じて地域振興を行った非常に先駆的な例である。そして、今年も行われているが、3年に一度という形でずっと続けられており、日本のアートとして世界的にも非常に個性的なものとして評価されてきた。

つまり、アートは地域振興にも非常に重要な役割を果たし得るという成功例として示されたということである。

また、もう一つは世界のアートシーンの話である。従来、アーティストの関心というのは純粋に絵画上の色彩の純粋性などへの探求も当然あるが、それはごく一部の限られた人の関心しか引かなかったという現実もある。ところが、近年アーティストたちは、美術館やギャラリーの中でアート業界の人にしか分からない作品を作ることよりも、美術館から出て社会の様々な現場に関わるような作品を作る、作りたいという人たちが増えてきたということもある。これはソーシャリー・エンゲイジド・アートと呼ばれ方をすることもあるが、アーティストの基本的な制作のターゲットとして、社会的な事象の中で自分が気になること、それに対して様々なリサーチをして作品を生み出していくということが、近年非常に多くなっている。社会そのものにアーティストの関心が向いてきたということも、要因の一つであると思われる。

先ほどの大地の芸術祭の作品『棚田』は、妻有地域の棚田があり、そこに暮らしていた人々の生活を想起させる言葉と、造形的なものが棚田に加えられることによって実現されている。カバコフ夫妻というウクライナ出身の作家の作品である。

先ほど名前を出した北川フラムさんの言葉であるが、「要はアーティスト達が、この地を歩き、この地を知り、住民から学んで、あるいは直観で状況を把握して、場にふさわしい、結果として場の魅力を引き出す作品を作ったということだろう。」という言葉が書かれている。

つまり、今まではアーティストはアートの文脈を理解して、自分自身との対話の中で作品を作るというようなイメージだったかと思うが、地域に関わり、刺激を受け、あるいは地域の人と共同して作品を生み出していくというアーティストの姿勢が、地域に変化をもたらしているということかと思う。

芸術祭開催に当たってのキーワードを４つ挙げたい。

一つ目は、アートが持つ「可視化する力」。例えば、何もない状況では何の変哲もないまちに見えるという場面があったとして、そこに作品、アーティストの何か作品を設置することにより、単にまちを眺めていたときには見えなかったものが見えてくる、感じられてくるということがあり得る。これはアートの持つ、目に見えないものを可視化する力だと思います。

二つ目は、「オルタナティブな思考様式」。アーティストという存在は、例えば炭鉱のカナリヤなどといった例えで表されるが、多くの人が気づかないことに気づき、あるいは、道がないと思われているところに道を切り開くような存在である。これは、一般常識にとらわれている人たちからするとオルタナティブ（代替案）を考え出すような力を持った存在として、現代社会においては非常に重要であると見なされている。例えば、過疎地域に住む人たちは「私たちの地域には何もない」などと言いがちであるが、アーティストが入ることによって、地域の面白さや魅力を発見していくようなことがある。墨田区の場合は、既にそのようにオルタナティブな思考による地域の再発見が多くの場所で行われているので、これを持ち出す時にはまた別のアプローチが必要かもしれないが、いずれにせよ重要な視点である。

三つ目は、「多様なものを受け入れる寛容性」。近年、世界中で様々な社会課題を解決するうえで、自分と異なる考え方を持つ人たちとどのように共生するかというのが、非常に大きな課題となっている。そんな中、アートを通した体験というのは、人々にとって寛容性を育むことができるものである。特にイギリスを中心に、社会の中で実践されるアートに期待されているのは、寛容性である。「自分の考えとは異なるが、あなたの考えは尊重するよ」というのが寛容性であるが、それによって様々な人たちが同じ場所で集うことができる。我々の住むこの国、そして墨田区もまた多くの外国人が訪れるような状況になっており、あるいは生活をしていく外国人もこれから増えていくと思われるが、そういう場所で求められる寛容性を育むことへの期待も大きい。

四つ目は、「新しい価値を生み出す力」。アーティストというのは、周囲に必要とされてなくても何か作りたくなってしまう人たちであり、その結果として新しいものを生み出している。既にあるものを改善することでも新しいものは生まれるが、20世紀以降、社会の中で非常に重要視されてきたのは、アーティストが今まで見たことのないような新しいものを生み出すことのできる人であるという事実である。それが直接社会の役に立つかは不明であるが、ともかくその実践を保障していくというのが、特に欧米でアートが発展してきた背景にあることである。したがって、新しい価値を生み出すということも、重要なキーワードになると思う。

こうしたことが芸術祭を通して、町や村といった小地域の中で起こっていくということが、芸術祭なんだろうと思う。

各地の芸術祭の事例を見ていくと、大地の芸術祭や奥能登国際芸術祭は、過疎地域の課題解決へのアプローチとして開催されており、交流人口、定住人口、働く場など経済圏の生成に主眼を置いている、一方で、国際芸術祭あいち（旧あいちトリエンナーレ）や、今年春ごろ開催された横浜トリエンナーレは、ジェンダー、性的マイノリティ、移民、環境問題等の社会問題をテーマとするものが多い。都市の社会的課題の解決や、問題意識への気づきがテーマになっている。

墨田区でも総合的芸術祭の開催が計画されている。墨田区はもちろん都市であるが、東京の中でも古くから人が暮らし続けてきた歴史あるまちであり、新しいものが生まれ続けるまちでもある。今日も多くの職人さんがいらしているというふうに伺っている。

また、墨田区のシティプロモーションマークは、「人」という字が目立っているが、私は墨田区に関わるようになって、なるほどと実感をしている。墨田区民のアイデンティティというのはやっぱり人である、人のつながりであると。多くの魅力的な人々が暮らし、共に活動するまちであるというメッセージを感じる。

ここまで、各地で開催されてきた芸術祭の整理をしたが、いずれにも当てはまらない、他の地域と異なる個性、魅力を持った墨田区らしい芸術祭を生み出せるのではないかと思う。どんな芸術祭が実現できたらよいか、どのように芸術祭を作っていくべきか、どのように芸術祭に関わっていきたいのか。そのようなことを話し合うことが、今回のタウンミーティングで求められることだと思っている。非常に限られた時間ではあるが、墨田区にふさわしい芸術祭を作っていくために、皆さんからいろいろ教えを乞いたい、考えを深めたいというのが、今回の私のプレゼンの趣旨である。

引き続き、青木さんの方から、芸術祭の中で行われていくアートの作品、あるいはアートプロジェクの一例としてこんなことのイメージというのを共有してはどうかということを、紹介していただく。

■ゲストトーク

青木『墨田区らしい芸術祭とは？』：

神野さんからお話のあった、文化芸術の捉え方が幅広くなっていったということや、アーティストたちがアートワールドの中にとどまらず社会に目を向けている潮流が生まれてきているということに関連して、簡単な事例ではあるが、私自身が墨田区の中で見聞きしたものについて紹介したい。

2019年に決定的な出会いがあった。曳舟駅の近くで、1919年から地域福祉の活動を続けてこられた社会福祉法人興望館というところとの出会いである。

墨田区で文化芸術活動を行う団体の人たちが勉強や交流会を行うイベントというのが月に一回開催されており、そこで出会ったのがきっかけである。従来の感覚から言えば、福祉活動というのはアートとは異なるものと思っていたが、100年の活動の歴史の中で、地域の子どもたち等に様々な文化活動を提供していたということを知った。また、写真、保育日誌等の形で、それらの記録が保管されているということを伺った。

そこで、職員さんたちと意見交換し、地域福祉とアートに関連して何か一緒にできないかというお話が生まれた。最初はその職員さんをお呼びして、地域福祉活動とアートプロジェクトの接点あるいは相違点について話し合うようなトークイベントを開催した。

それをきっかけに、さらに実践的な取組をしていこうということで、アーティストを招いて、興望館を舞台に二年間共同事業を始めることになった。事業のテーマは、興望館が持つ100年の地域福祉活動の歴史を、アートを通じてより多くの人に伝えていこうというものであった。

とはいえ、いきなり展覧会等を開催することはできないため、まずは私たち自身が興望館の活動に寄り添いながら、その歴史を肌で感じようと考え、一年目は興望館の学童の子供たちに向けてワークショップを始めた。

この年から招へいしたのが碓井ゆいさんという方で、社会運動等をテーマに手芸技法で作品を作られているアーティストである。一年目のワークショップを踏まえて、二年目に、成果発表の場として興望館の一角で展覧会を行った。１階では、興望館でこれまで行われてきた様々な文化活動の記録写真や図面等の資料展示になっており、２階では、碓井さんが興望館に保管されていた写真を元に制作した手芸作品や、職員の日誌をモチーフにした言葉による作品等を展示した。

墨田区で総合的芸術祭を開催すると聞くと、先ほど神野さんから事例紹介があったように、屋外で大規模なものとか、有名なアーティストが海外から来るんじゃないかとか、いろいろなことを想像されると思うが、墨田区では、いわゆるアートのみならず、地域に根ざした文化活動、表現活動というものが既にたくさんある。そういったものから、墨田区らしい芸術祭というものを想起していくことができたら、まさに墨田区だけの新しい芸術祭というものを皆で一緒に作っていけるのではないかということで、簡単な事例紹介とさせていただく。

■ゲストトークに対する区長コメント

区長：　今お二人から様々な公体系というか、法改正に基づいているというお話を聞いて、改めて実感した。新潟を始め様々な自治体の事例も見て、こういうやり方もあるなというのもしっかりと頭に入れつつ、神野先生からも言っていただいたが、すみだらしさのある総合的芸術祭というのをこれからしっかりと想像していくと。また、青木さんから言っていただいたように、すみだらしいというのがまたすごくいいものになるだろうということを想像しながら、お話を聞いていた。ありがとうございます。

■グループワーク１「アート」という言葉で連想ゲームをしよう！

■グループワーク２　墨田区で経験した嬉しかったこと

Ｇ班：　一点目の「アート」という言葉から連想するのは、具体的に「モーツァルト」「北斎」等の単語が挙げられた一方で、「変わってる」「違和感」といった、予定調和がないということがイメージだという意見が挙げられた。また、マイノリティの視点、アイデンティティ、社会へのメッセージという意見が挙げられた。

二点目の、墨田区で経験した嬉しかったこととしては、まずもつ焼き、もつ煮等の個性的なお店。また、世界に冠たる大相撲、隅田川及び隅田川花火大会、古民家、そして街歩きといった、割と身近なところがすごくいい経験であるという意見が挙げられた一方で、スカイツリー、国技館、新日フィルといった、日本中でここにしかないというものが挙げられた。また、祭り囃子、盆踊りといったものが非常に墨田区らしいというイメージであるという意見もあった。

神野：　ありがとうございます。それでは、グループの方に入っていただいた区長の方から、コメントをお願いします。

区長：　２つのグループに入らせていただいたが、すごく斬新な、このままいくと矛盾が起こるんじゃないかというようなお話もあり、非常にアートの捉え方というのはそれぞれ異なったものをお持ちになっているなと感じた。

一方、意見が一致する部分もあった。それは気付きがあったり、心に潤いを与えたり、明日への活力になったり、感動があったりという、人の心を動かす力、区長の立場で申し上げると明日の区民のパワーになりそうな感覚である。

また、人と出会える、声を掛けてもらえる、何年振りかに会って次の、そこでお話ができて次の展開に進む、自分がリニューアルして住んだ築100年超の家に、前の住人が帰ってきて、ここは元私の家だったって出会える、これは墨田区ならではだと思う。私は「人つながる墨田区」と言っているが、人と人とがつながってパワーというのは何かを生み出す、総合的芸術祭に向かって皆が出会って、力を発揮してくれる、そのパワーを持った人たち、区民という印象を持たせていただいた。ありがとうございます。

■グループワーク３　アートを通じて墨田区で叶えたい夢を語ろう！

Ａ班：まちの資源を体験できる場にしたい！

Ａグループでは、まちの体験の場になればいいという意見が挙げられた。グループのメンバーが日々行っている活動に関係しているが、具体的には「まちの映画館を作る」「職人さん」「お祭りの体験」「多言語に対応している」等である。また、まちの資源を活用できるように。これは私の夢であるが、カミソリ堤防BARを必ずやりたい。

また、まちの資源を活用したいという意見が出された。マイナスの資源というのは近年減ってきているが、マイナスの資源をプラスにできるようなものとか。

さらに、区長から御意見をいただいたが、子ども「も」参加できるようにすることがとても重要である。子ども「と」や子ども「が」ではなく、子ども「も」というのが、大人の仲間入りをさせられるような言葉であると思う。

何でもOKと区長に言っていただいたので、様々なことにチャレンジし、生活に近いまちの中でとりあえず何かやってみるということをアートのフィールドでやれたら、アーティストに助けてもらえたらと考えた。

Ｂ班：アート心を引き出す仕組みがほしい！

Ｂグループでは、ロジカルというよりエモーショナルな意見がたくさん出た。まず、とにかくまちを舞台にして、まちの人が参加できるような芸術祭にできたらいいなという意見は、全員が一致した。

芸術というのは、実は限られた人のものではなく、ここにいる僕ら全員がきっとそういうマインドを持っているが、発揮する機会がなかったり、どうやっていいか分からないという状態にあると思っている。今回の芸術祭で、僕らの中のそういうものを引き出してくれるような仕組みを持てたらとてもいいという意見が挙げられた。

例えば、極端な意見だが、芸術祭の間は大人も楽しみたいので長期休暇と区で決めていただくことで、気兼ねなく参加できると思う。また、墨田区全域をスマホ禁止エリアにして、まちの中であえて迷ってもらう。そこでまちの人に案内してもらって、とにかく人と人が交わるような仕掛けを作ったら、新しいものができると思う。

Ａ班の発表にあった職人さんを例に挙げると、職人さんは技術を持っているが、その技術をどのように新しいものに生かせばいいか分からないので、アイデアを引き出してもらうような芸術祭になったら、新しいものができると思う。

とにかく長期休暇と、できれば儲かる芸術祭。区民全員がボランタリーな関わりだけではなく、経済的にも精神的にも潤うような、そんな芸術祭になるといいなと思う。

Ｃ班：持続可能性のある芸術祭にしたい！

Ｃグループでは、墨田区について人と人とのつながりが近い、手仕事といったキーワードが挙げられた。

しかし、私は人と人との距離は近いが、実は個々のコミュニティに閉じこもっており、横のつながりができていないと思うことが多々あり、それを皆さんに申し上げて聞いていただいた。

具体的に出たのは、隅田公園、スカイツリー内をジャックするような形、外国人の方も含め、一部の人間だけではなくまち中の人間が参加できて、来年もやりたいなという持続可能性があるようなことをやっていきたいと思う。

今日がキックオフなので具体的な形は見えていないが、対話を続けていただきたいなということを、今日一番望んでいる。

Ｄ班：墨田区をアートのまちにしたい！

Ｄグループでは、持ち運びができる茶室を制作したという指物師の方や、長屋文化の保存のため向島EXPOというイベントを主催している方がおり、そういった方のように、地域にアートが根付く環境を作っていく取組を実施したらどうかという意見が挙げられた。また、東京大空襲という負の歴史もアートを通して伝えたらどうかという意見が挙げられた。

まちに芸術が根付いて、芸術家やクリエイターがたくさん集まるような、そんな芸術祭にしたい。芸術祭自体じゃなくてまち自体がアートになっていく、芸術祭が終わっても墨田区をアートのまちにするようなイメージを持ち、また目的としてやってほしいと思う。

Ｅ班：新しい価値観の発見を促したい！

Ｅグループでは、先ほどのグループワークを通じて、他の地域に比べて墨田区は生活と文化芸術との乖離が起きておらず、割とグラデーションでつながっているということに気づいた。

墨田区の良さとは、産業としてのものづくりや、文化芸術が身近にあり、生活と地続きになっている点にある。基礎ができているので、これをアートまたは芸術祭で可視化するとか、もしくは強化するということができたら、すごくいいと思う。

言うなれば科学反応を起こして、それが次の科学反応につながるようなストーリーを生むということが大切だと思う。

その結果、例えば地場産業であるものづくりへの敬意が生まれることや、知名度が向上したりすることが期待できる。また、Ｂグループから「儲かる芸術祭」という意見があったように、経済効果を生む。私としても、芸術祭ではちゃんと儲けなきゃだめだと強く思っており、実現すれば経済的にも効果的であると思う。

世界的にそうかもしれないが、インターネットの普及により、家や部屋が城になっており、そこから出ない生活が物理的に可能になっている。そのような状況は、自分の暮らしやすい、住みやすいところから出たくない、自分が従来持っている価値観から新しいものを吸収したくないという気持ちのメタファーではないかと、勝手ながら感じている。

自分の心地良いところにいるとすごくいい気持ちになるが、停滞しているのは好ましくないため、コンフォートゾーンを能動的に出る必要があると思う。それを可能にするのが芸術の力であると思っているので、あ、そんな価値観あるんだ、知らなかったとか、こんな世界を見られるんだ、知らなかったとか、そんな気づきが生まれたら素晴らしいと思う。

Ｆ班：人と人とのつながりを広げたい！

Ｆグループでは、墨田らしさについて単純に考えた結果、まちと人に良さがあると考えた。そのため、路地や下町の魅力を生かして、展示やアートの発表の場を内よりも外に持っていきたい。

また、人と人との関係性についても墨田らしさがあるという意見が挙げられた。心地よいおせっかい、笑顔、人に声を掛けられる地場、そのような良い点を、アート活動を通じて広げていきたいと考えた。アートによって人とのつながりを増やしていきたい。

また、先に発表したグループからも出た意見だが、お子さん、お年寄りといった多様な人が参加できる、そういう芸術祭になればいいと思う。

Ｇ班：地域課題の解決と区のＰＲを両立したい！

Ｇグループでは、芸術祭が地域課題を解決し、地域の発展に寄与していくといいという意見が多く挙げられた。

例えば、町会活動に熱心に取り組んでいる若い方からは、町会活動が縮小している現状があるので、アップデートするようなきっかけになればいいという意見があった。

一方、対外的に墨田の魅力をアピールすることも大切だという意見も挙げられた。

子どもや若者にとって、東京都の東側の地域は、中央線沿線や西側に比べてイメージが劣るような部分もあるかと思う。しかし、そのイメージを覆して、子どもや若者がわくわくするようなきっかけになったらいいという意見があった。

そのような外へのアピールをしながら、自分たちの持っている、人と人とのつながりやふれあいと、歴史といった魅力を再発見し、新たな形で未来へとつないでいけたらいいと思う。

最後になるが、墨田区はもつ煮、もつ焼きのお店が最高だから、それを世界に知らしめて、もつ焼きを食べに多くの人が訪れるような、そんなところにもなったらいいと思う。

Ｈ班：公共空間を活用したい！

Ｈグループでは、今あるものを活用して、コミュニケーションが生まれるきっかけを作り、それぞれ個人が表現できることが大切であると考えた。今あるものの具体例としては、公民館等の公共施設である。

また、先に発表したグループから意見の出た地域資源という観点で考えてみると、路地園芸なども公共空間を活用した地域資源であるといえる。

■神野氏コメント

神野：　慌ただしい進行であったが、本当に多様な意見が出て、しかし多くの部分で共通するなと思える点がそれぞれ違った言葉で発表されたと思う。まず、私の方からまとめをさせていただいて、その後区長からコメントをいただければと思う。

やはり、皆さんはいろんな文化芸術活動や地域活動を行っているため、語ることの共通項が多くあり、面白いと感じた。

私が特に印象に残った点で、なおかつ芸術祭を開催する上で非常に重要になってくると思ったのは、Ｈグループからも発表があったが、既にあるものをどう生かすのかということである。私が参加したＡグループの中では、マイナスの資源をプラスに、という発表があったが、例えばネガティブなイメージで捉えられていることも、別の捉え方ができ、別の使われ方があると気づくことは大事なことであると思う。既にあるものは、当然ネガティブなものばかりではない。最も印象に残ったのは、やはり「人」である。墨田区のシティプロモーションマークにも「人」の文字が使われていると区長もおっしゃっていたが、人間関係の濃密さのようなものが墨田らしさと言える。

Ａグループでは、若い頃は人間関係が鬱陶しかったが、年を重ねるにつれて、それがありがたいと感じるようになったという意見があり興味深かった。子ども「も」参加できる芸術祭、という意見にしても、例えば地域の祭りに参加することは子どもにとって負担であるが、そこで子ども扱いして過保護にしないからこそ、子どもが大きく成長するということも見受けられる。過度に負担をかけると大変かもしれないが、やはり適度に、子どもたちを子ども扱いせず大人として、仲間として扱っていくということというのは、未来志向の中で重要なキーワードだと思う。人と人との新たなつながりをどういうふうに作っていくかということは、墨田区の芸術祭にとって非常に重要なことになると思う。

Ｇグループからもつ焼きの話もあったが、Ａグループの中では志゛満ん草餅の話が出た。私は食べたことがないので、今度食べに行きたい。

Ｂグループの意見で長期休暇、芸術祭開催中は皆で休んでしまえというのも、実現は難しいかもしれないが、コンセプトとしてはとても面白い。芸術祭開催中は、早めに仕事を切り上げて早く帰りたいなというような空気があってもといいなという気もした。また、スマホ禁止エリアという意見も、ちょっと面白いなと思うと同時に、私だったら耐えられるだろうかという不安も感じた。やはり芸術祭という場で、まちを舞台にいろいろ実験とかトライをすることを皆さん求めていると感じた。

まちにアートが溢れることでそこから刺激を受けたり、あるいはそこに参加したり作ることに関わる中で、多分自分自身も変わっていくだろうと。作るというのはできごとを作るということでもあり、また、墨田はものづくりのまちでもあるので、何かものを作るということの中から、大量生産大量消費の時代に、ものの大切さも学べるということもすごく大事だという意見も出た。

墨田区には、既にあるものを様々な側面から見ることで、どこからか借り物として借りてくるのではなく、既にあるものの中から何とかそれを磨いていったり、あるいは別の言い方を模索したりという素地が十分にあるというのが、グループワークを通じて強く感じた。

冒頭、芸術祭は国の法律でも定められているという話をしたが、国内に芸術祭が乱立しているような実態の中で、再興するというのは非常に難しい状況である。しかし、墨田には個性的な資源が多くある。例えば、隅田川と荒川に挟まれた地形、歴史、ものづくり、お相撲さん、手前事ではあるが千葉大学のキャンパスもできたこと等、様々な資源があって、さらにその基盤として人と人との関係性が重要なこととしてある。それらの資源をどのように磨き、発展させるのか。アートというのは、ちょっと飛躍をしてみたり、つながらないところをつなげたりとか、いろいろなことをやるものである。そういうことを一緒に体験できる場が芸術祭、墨田の芸術祭なのかなという気がしてきた次第である。

今後も、芸術祭に関する対話の場所を設けてほしいという話もいただいた。タウンミーティングという形なのか、別の形なのかは分からないが、それは非常に重要なことだと思う。恐らく区長もまたその場にはご出席いただけるかと思うが、引き続き今日のような議論をしていきたいと思う。今日は沈黙することがなく、全てのグループが活発に話し合っていた。それが、やはりこの地域の力だと思う。今日は皆さんの言葉でいろんなものが紡がれていき、それを共有する最初の機会になったと思う。

■区長閉会挨拶

３つのグループに入って意見交換をさせていただいたが、真剣かつユニークに、非常に感覚豊かな面白いご意見がたくさん出て、ところがそれぞれ真意を突いているというか、墨田区のことをよくご理解いただいていると感じた。また、８つのグループからの発表で出てきたたくさんのキーワードを結びつけるというか、解読、分析することで、だんだん収斂されていき、いいものができていくと感じた。今回はキックオフの場だったので、皆さんには新鮮な、フレッシュな感覚を持って発表していただいたが、そこで出てきた言葉というのはすごく大事なものだと思っているので、それを踏まえて、神野さん、青木さんにもご協力いただき、またこういう機会を設けさせていただきたいと思う。

また、区長が考える「総合的」とは何かというお尋ねをいただいた。「総合的」とは、人で言うと全員参加が実現している状態である。例えば今日皆さんからいただいた意見から始まって、終わった後に参画した皆さんが自己肯定感、満足感を得られ、また何年後に開催しようというふうに、皆さんで想像していただくような状態が理想である。大人だけでなく、子どもたちにも芸術祭を通じて、芸術祭への想い、こういうまちであるというか、こういう人がいるというか、こういう大人がいるということを感じ取っていただきたい。それは子どもの将来にまで残る芸術祭のレガシーになると思う。また、様々な資源、多様な人がいるので、制限せず、多様なジャンルの方々が表現をするということは必須だと感じた。限られた開催期間という難しさはあるが、何でもオーケー、様々な表現がいろいろなジャンルで繰り広げられるというイメージを私は持っている。以上が「総合的」とは何かについてのお答えである。

それから、今日いただいたキーワードの中で、例えば力士が参加するとか、向島の芸者さんが登場するとか、すみだ北斎美術館がどんな役割を果たすのかとか、観光と文化芸術の融合って一体何なのかとか、多くの検討事項が挙げられた。ここは再来年に向けて、皆で詰めていくというか表現していきたいので、ぜひ引き続き皆さんの力を貸してほしい。

長期休暇を墨田区役所で作れるかどうか分からないが、仕事をしたいという真面目な社員もいるかもしれない。スマホ禁止、こんなことを区長名でやったらブーイングがたくさん出そう。しかしこれらは非常に面白い発想だと思う。できるかどうかは別として、ぜひこんな発想を自由に出してほしい。一方、ぜひやりたいと思う意見もあった。それは盆踊りであり、23区でも随一の自慢である。実は盆踊りの参加者数というギネス記録があり、2,872人が現在の最高記録である。先日中野区で挑戦したが認定されなかったと中野区長が言っており、私は黙っていたが、墨田区だったら軽く超えられると内心思っている。そこで、芸術祭のフィナーレで北斎通りを完全に交通規制して、一万人ぐらいの人がギネスの認定基準に合った踊りを全員で踊る。これで墨田区がギネス記録を更新したとなったら結構面白いんじゃないかな・・・誰も賛同してないんで止めておきますね。まぁそんな発想のぶつけ合いが、今日のタウンミーティングの最終みたいなところであります。

本当に遅い時間まで、皆さんありがとうございます。これto be continuedでいきますので、ぜひまた皆さんとお会いできる楽しい機会を楽しみにしていますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。